

聖 書：マルコの福音書 10：13～22

説教題：永遠のいのちを受け継ぐために

日 時：2026年1月11日（朝拝）

今日は二つの記事を一緒に取り上げさせていただきました。一緒に読むことで両方の箇所をより良く理解することができると思うからです。まず最初の箇所では人々が子どもたちをイエス様のところに連れて来ます。手を置いて祝福していただこうと思ったからでしょう。ところが弟子たちは彼らを叱りました。理由ははっきり書いてありませんが、「イエス様はお忙しいのだ」「あなたたちに構っている暇はない」ということでしょうか。それを見てイエス様は「憤った」とあります。非常に激しい言葉です。そして弟子たちに言わされました。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。」似た言葉がすでに9章37節でも語られていました。弟子たちはその時、誰が一番偉いかを論じ合っていました。そんな彼らを教え諭す際、イエス様は一人の子どもも真ん中に立たせ、腕に抱いて言わされました。「だれでも、このような子どもたちの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」ここで語られたのは神の国への受け入れは、ただ恵みによるということです。立派で偉い者になってから入るのはではない。イエス様ご自身がこのようにへりくだって子どもを受け入れておられるのだから、あなたがたもそのようでありなさいということでした。その教えを受けたばかりの弟子たちでしたから、今回連れて来られた子どもたちを追い払うべきではありませんでした。いかに靈的に鈍い彼らだったかが、またしても示されました。

続く15節でイエス様はこう言われます。「まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」14節が神の国の性質——そこはただ恵みの国であること——を示すものであるのに対し、15節は、その国にどうやったら入れるかを語っています。すなわち子どものように神の国を受け入れるということです。では子どものように神の国を受け入れるとはどういうことでしょうか。当時、子どもは社会的に重要視されず、低い存在と見なされていました。確かに人前で誇れる功績も資格もありません。それでも彼らに学ぶべきところがあるとイエス様は言われます。それは受容することです。受け入れるこ

とです。幼子は親に完全に依存しています。それはそうしなければ生きていなければなりません。自分がその恵みを受けるには、まず自分がふさわしい人間にならなければ！とは考えません。立派な者になり、資格のある人間になってから受け取るとはしません。子どもは自分が弱く、支えられなければ生きられない存在であることを本能的に知っています。ですから差し出されたものをそのまま受け取ります。それにすがり、それに依存します。それで良い！とイエス様は言っておられます。神の国は徹頭徹尾、恵みの国です。恵みを恵みとして受け取る人、その恵みを感謝して受け取る人、その人だけがそこに入ります。

さて、これだけですとそんなに難しい話ではないように感じます。しかし続く二つの記事も合わせて読む時、両方の記事の意味がより深く浮かび上がって来るよう思います。17節から二人目の人が登場します。彼は先ほどの子どもたちとは対照的です。彼は大人であり、しかも後に分かるように金持ちでした。それに伴う社会的地位や名声も備えた人だったでしょう。マタイとルカの平行記事からは、彼が青年であったこと、また指導者（第三版までは「役人」）であったことが分かります。その彼が走り寄って来てイエス様の前にひざまずきます。社会的地位のある金持ちが走り、ひざまずく——それだけでも驚きます。彼がいかに熱心で、真剣であったかが分かります。その彼はイエス様にこう尋ねました。「良い先生。永遠のいのちを受け継ぐためには、何をしたらよいでしょうか。」この問い合わせに対してイエス様は18節でこう答えられます。「なぜ、わたしを『良い』と言うのですか。良い方は神おひとりのほか、だれもいません。」一見すると、冷たく突き放す言葉のようにも聞こえます。せっかく熱心に求道している人を拒む態度のようにも見えます。しかしイエス様は彼を退けたのではなく、正しく導こうとされたのです。イエス様が問題にされたのは「良い」という言葉の使い方でした。この人は「良い方」は神お一人であるということを深く考えずに、この言葉を軽く使っているということです。言い換えばただ人間的な基準で考えているということです。この後の彼のやり取りから伺えるように、彼は自分自身をも「良い人間」だと考えていたようです。正しく生き、人から尊敬されるような者であると。にもかかわらず永遠のいのちを自分は持っているとの確信がなかった。そこで別の「良い方」に聞こうとした。イエス様はこのような彼の言葉の使い方の中に彼の根本的な誤りがあると見られたのです。つまり真の神を見上げていない。ただお一人正しい方である神の前で自分を考えていない。ただ人間的なレベルでのみ考えているということです。

そこでイエス様は彼の心を神に向けさせるため、十戒の戒めのいくつかを並べます。特に後半の隣人愛に関する戒めです。それを行ったかどうか、すぐ検証できる戒めです。律法に従って歩む人はいのちに生きます。エゼキエル書33章15節に「いのちの捷に従って歩むなら、彼は必ず生き、死ぬことはない」とある通りです。これはもちろん罪に堕ちた私たちが自分の力で律法を行っていのちを獲得できるという意味ではありません。ただイエス様は彼を神の律法の前に立たせ、彼が自分をどう評価するかを見ようとされたのです。それに対して彼は20節でこう答えました。「先生。私は少年のころから、それらすべてを守ってきました。」ここに自分は正しく生きてきた人間であるという彼の自負が見られます。「少年のころから」「すべてを」守って来たと言うのです。信じられない！と私たちは思うかもしれません。しかし当時のまじめなユダヤ人は、そう考えたようです。パウロもピリピ人への手紙3章6節で、かつての自分を振り返り、「律法による義については非難されるところがない者でした」と言っています。もちろんその理解は表面的なものと言わざるを得ませんが、そのように考える人は決して珍しくはなかったのです。

イエス様はそんな「彼を見つめ、いつくしんで言われた」と21節にあります。「いつくしむ」という言葉は「愛する」という意味の言葉です。つまりイエス様は見当違いな回答をしている彼を決して愚弄したり、見下してはしていないのです。誤った考え方をしている彼をなおあわれみ、愛されたのです。そして愛しているからこそ、次の言葉を語られました。イエス様は彼に「あなたに欠けていることがあります」と言い、続けてこう言されました。「帰って、あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」初めて読む人は強い衝撃を受けるかもしれません。え～！イエス様に従うためには、ここまで求められるの？これでは誰もついて行けないのではないか？と。しかしイエス様はこれによって彼に「あなたは何を求めているのか」、また「あなたは何に信頼するのか」を問われたのです。ただ恵みによって救ってくださる神に信頼するのか、それとも自分が築き上げて来たもの、財産や業績、地位や名誉、自らの道徳的な生き方、そうしたものにより頼むのか。彼はこの後者の道を進んで来ました。しかしその歩みが永遠のいのちをもたらしていないことも彼自身良く分かっていました。その判断は正しいのです。神の国は神が恵みによって与えてくださるものだからです。だから彼はイエス様が招く道に進めば良かったの

です。その際、そのしるしとして信頼に値しないものを手放すことを求められたのです。

私たちはこの言葉に驚くかもしれません。しかしこれはすでに言われて来たことでした。イエス様は8章34節でこう言っておられました。「だれでもわたしに従って来たければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」あるいは9章43~47節では「もし、あなたの手（足）（目）があなたをつまずかせるなら、それを切り捨てなさい。両手（両足）（両目）がそろっていてゲヘナに投げ込まれるよりはよいのです」と言われました。神の国に入るために妨げとなるものがあるなら、それを捨てなさいと言われていました。実際、主の弟子たちはそうして來ました。この福音書の1章でガリラヤ湖の漁師であったペテロやアンデレ、ヤコブやヨハネは網や船を捨て、また父を後にしてイエス様に従いました。また2章では取税人レビも、多くの収入を得られる仕事を後ろに捨てて立ち上りました。永遠のいのちという神の恵みは、ただイエス様を通して与えられます。彼らはみな、この恵みを受けるため、自分にとってそれまで大切だったものを躊躇なく捨ててイエス様に従いました。それはまさに子どものように神の国を受け入れる姿でした。

では今日の箇所の人はどうだったでしょうか。22節に「すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った」とあります。そしてその後に「多くの財産を持っていましたからである」という説明がついています。つまりこれが彼が選び取った神、すなわち彼の偶像であったということです。彼はそれが永遠のいのちを与えてくれないことを感じていました。だからこそイエス様のもとに來ました。しかし彼の心はこの世の富と生活にがっちり支配されていたので、イエス様が差し出す恵みの道に踏み出せなかったのです。彼は永遠のいのちを求めているとは言いましたが、実際にはこの世の生活、この世の富の方が大事だったのです。彼は悲しみながら財産を自らの神とし、偶像礼拝を続ける道へと戻って行きます。そんなに悲しむなら、恵みの国へ招くイエス様に従えば良かったのにと思いますが、それができないのです。イエス様に従う道にはペテロやヨハネやレビが味わった喜びがあります。しかし従わない道には、このような満たされない悲しみだけが残るのです。

さて今日の箇所は私たちにどう当てはまるでしょうか。多くの人にとって、この箇所は衝撃かもしれません。そして特に思うのは、私たちも財産すべてを売り払い、貧

しい人たちに与えなければならないのかということではないでしょうか。結論から言えば、これはすべての人にそのまま当てはまる普遍的命令ではありません。聖書の他の箇所を見ると、財産を持ちながらイエス様に従っている人々もいるからです。これは特定の状況にある人に語られた特定の命令であると言えます。しかしだからと言って私たちは安心してしまって良いわけではありません。では私に対して、主は何と言われるだろうか——そう問い合わせが必要があります。私にとって主に第一に従うことを妨げているものはないでしょうか。神に従う歩みにおいて神のライバルになっているものはないでしょうか。今日の箇所の人にとって、それは財産でした。だからイエス様にそのことを指摘されました。では私たちにとってはどうでしょうか。ある人にとっては、それは今日の人と同じく、富やお金かもしれません。ある人にとっては仕事や社会的地位、評価かもしれません。家族や愛する人、あるいは趣味や楽しみが、神に従うことより上に来てしまう危険もあります。もしそうであるなら主は私たちにも、その領域において同じ問い合わせを投げかけられるのです。永遠のいのちは神が恵みのゆえに与えてくださるものです。それはイエス様を通して私たちに差し出されています。ですからそのイエス様から恵みを受け取ろうとする人にとって、イエス様が命じられることは常に他のすべてに勝っていかなければなりません。主の御心と私たちの大切にしているものが衝突しない限り、それらを持ち続けること自体は問題ではありません。しかし、もし主が「それを手放しなさい」と言われるなら、躊躇なくそうすることができなければなりません。もしそこで少しでも迷いが生じるようであれば、あなたの本当の心はどこにあるのか?ということになってしまいます。

ここで次のような疑問を持つ方もおられるかもしれません。救いはただ信じるだけで与えられるのではないのか。行いにはよらないのではないかと。確かにその通りです。今日の箇所も行いによる救いを教えているわけではありません。財産を捨ててという行為は救いを得る条件ではなく、信仰の結果に関わることです。信仰に必然的に伴うもの、信仰の現れです。キリストを信じるとは、自分が罪ある人間であることを認め、そのままでは最後のさばきに会うことを恐れて、まるで保険をかけるかのごとく「イエス様を信じます」ととりあえず言い、あとは好き勝手な生活をすることではありません。「自分はどうせ罪人ですから」と罪の生活を肯定しておいて、最後の審判の時に、「あの~、私はイエス様を信じます、と言ったんですが」と言っても、それは信じたということにはならないのです。イエス様を通して与えられる神の救いはただですが、そのイエス様を私の唯一の救い主として信じるなら、その方の言われること

に喜んで従う者でなければなりません。もしそうしないなら、それはイエス様以外のものに重きを置いているということであり、それは結局、それを神とする偶像礼拝に他ならないのです。

昔、インドで行われていたココナツを使った猿の罠の話を聞いたことがある方もおられるでしょう。ココナツの殻をくり抜き、猿の手が入るほどの穴を開け、そこに米を入れて鎖につなぎます。猿は手を突っ込んで米をつかみますが、握ったままでは手が抜けません。人が近づいて来た時、助かる道は一つです。握っているものを手放すことです。しかしそれを離さなければ捕まえられてしまいます。まさに今日の箇所の金持ちと同じです。あるいはイエス様は「狭い門から入りなさい」と言われました。門が狭いばかりか、その後に続く道も細いと。そこを通るために抱え込んでいるものを置いて行かなければなりません。しかしその先には永遠のいのちがあります。子どもは主張するものも持ち物もないため、ためらわずにそこを通って行きます。しかし大人はどうでしょうか。自分の力で様々なものを積み上げて来たと自負している人は、それが邪魔になり、その狭い門、細い道を通って行けない。それが今日の人です。永遠のいのちは功績によらず、ただ恵みによって与えられるものです。そのことを知り、より頼む必要のないもの、妨げとなるものは喜んで手放し、恵みの道を進んで行く者でなければなりません。

すでに信仰を持っている方々は、そのようにしたはずです。イエス様を信じた時、他のものもしっかりとつかんだままではなかったはずです。イエス様が十字架でいのちをささげて勝ち取ってくださった救いは何物にも代えがたいものです。このイエス様こそ第一であり、それ以外のすべては後ろに置かれる——私たちはそのように優先順位をリセットしてイエス様に従い始めたはずです。その私たちが今日の箇所を通して問われることは、その姿勢を自分は今日も保っているだろうかということです。主を第一とし、主が言われるなら、喜んで他のものを捨てられるか。そうする人こそ、主の弟子であり、永遠のいのちを受け継ぐ人です。

今日の箇所に出て来た人が感じていたように、この世の富や地位、名誉、若さ、また人間的に正しい道徳的生活では永遠のいのちを得ることはできません。神の国は私たちが自分の力で勝ち取るものではなく、恵みによって受け取るものです。その恵みはイエス様を通してのみ差し出されています。私たちは子どものようにこれを受け取

り、喜んで主に従う歩みへ進みたいと思います。永遠のいのちをもたらさないものに心を縛られて、悲しみながら立ち去る者ではなく、恵みによる神の国を子どものよう受け入れ、イエス様に従って、永遠のいのちを受け継ぐ幸いな歩みへと導かれて行きましょう。